

月夜野温泉の旅 2019



2019年12月

旅のチカラ研究所 植木圭二

群馬県みなかみ町の月夜野温泉に泊りがけで忘年会に行ってきた。同行したメンバーが実に面白い連中で忘年会は否が応でも盛り上がり、それに対してひなびた温泉地の素朴なおもてなしが対照的で日本の温泉文化の神髄に触れたような旅になった。

■月夜野にて

集合は JR 上越線の後閑駅、ここで私の運転する自家用車組と電車組が合流する予定になっている。

私たちは集合時間よりも少し早く着いたので「焼きまんじゅう」と大きな看板を出している店に立ち寄る。同乗の3人は焼きまんじゅうは初めてということで、その存在さえも知らないという言葉に驚く。中身が入っていない素まんじゅうを串に刺して甘い味噌ダレをつけて焼いた群馬県のソウルフードだと説明するが、とにかく食べてもらうしかない。

神妙な顔をして食べる彼らに初体験の感想を聞くと、「こんな味なの、美味しいよ」と一応褒めてはいるがあまり感動は伝わってこない。群馬県出身の私にとっては懐かしさがこみあげてくるのに、ソウルフードとはそんなものなのだろう。

東京から行くと月夜野温泉は沼田の先、谷川岳の麓のみなかみ温泉よりも手前にある。近くには比較的名前が知れた猿ヶ京温泉や法師温泉があるが月夜野温泉を知っている人は少ない。私にしても月夜野は知っていたが、月夜野温泉は今回初体験で少し新鮮な気持ちになっている。

参加メンバーも全員集まり、これから男女9人温泉物語が始まる。

■優しい温泉宿

今宵の宿はその月夜野温泉の「みねの湯つきよの館」、他に月夜野温泉を名乗っている宿はないので一軒宿だ。

しかし秘湯の一軒宿ではなく、かといって近代的な鉄筋コンクリートの宿でもない。ある意味中途半端な宿なのに、素朴だが何となく暖かいぬくもりを感じさせる。出迎えてくれた女将や従業員の間かきめ細かい対応のせいなのか、山里の優しい温泉宿という独特の雰囲気心地よい。



早速、私たちは温泉に入る。風呂は至ってシンプルで素朴な湯でありながら、アルカリ泉ならではのスベスベな泉質とやや温めの温度も手伝って優しい湯に仕上がっている。その優しい湯がちょっと冷えた私の体を包み込んで、日頃の悩み事から心を開放してくれる。心が自由になると次の仕事へのアイデアや意欲が湧いてくる。何の変哲ものない湯なのに不思議だ。

宿は高台にあるので風呂の窓から見下ろすように月夜野の街並みが見える。利根川を挟んで学校や家々が集中して、その奥は上越新幹線の鉄橋、その奥には山々が連なっている。山々は人里を守るように大きな青空に対抗して存在感を示しているようにさえ見える。

この眺望がこの宿の自慢らしく「山里の風景に心が洗われる」という表現が実に似合う。

■芸出し大会

この忘年会の参加者たちは芸達者の集まりと言っていいだろう。

かつて「サラリーマン文化芸術振興会」という遊びと趣味の達人集団があった。

その会の設立主旨は「仕事と趣味を両立させて豊かな人生を送ろう」というもので、サラリーマンに限定しているわけではないが、恐らくは一生懸命に働く人という意味でサラリーマンを用いたのだろう。趣味や特技を持つ人が集まり、一芸に秀でた人が他の会員に芸を教えて芸と共に会員同士の交流の輪が広がったという。

残念ながらこの会は既に解散しており、今回の忘年会メンバーはその残党である。その残党に私も昨年あたりから顔を出しており今回の忘年会にお声がかかった次第だ。

私もこの考え方に賛成だ。人生の勝ち組と呼ばれる人、あるいは魅力あふれる人は仕事だけでなく、趣味や特技、スポーツ、芸術など仕事以外に打ち込むものを持っている。そのために人生に幅や厚みができて人間的魅力が増して仕事も成功するというもので、いわば人生における車の両輪になっている。

現役のサラリーマン時代の私にとっては旅行がその一つであった。

言うまでもないが、そんな残党たちの宴会は楽しい、そして凄い。

ここ月夜野が地元というメンバーがおり、そのメンバーが招待した踊りの達人から本格的宴会芸の宴が始まる。踊りの達人は和服姿で登場し、さすがに手慣れたもので見事な踊りを披露してくれる。

その後が続いて残党メンバーたちも次々に舞台上上がる。尺八の名人、電子オルガンの達人、箏曲の名人など登場する。新参者の私も何かやらなくてはと落語の枕をちょっと演じる。

芸出し大会には宿の女将や仲居さんまでやって来て一体になって楽しんでいる。その参加の仕方がビジネスライクでもなく、かといってあまり馴れ馴れしくもない独特の距離感が私たちをより心地よくしてくれる。この宿ならではのおもてなしや味わいというものだろう。

このような雰囲気はあまり私が経験したことのない、酒の酔いも手伝って心地よい夢を見ているような気分にしてくれる。

■ハレンチ二次会

一次会のやや高尚な大演芸大会が終わり、場所を男性陣の泊まる部屋に変えて二次会へと突入する。二次会はとんでもない。芸のクオリティは度外視で、勢いのみ、いわゆるノリをというものだけだろう。私も学生時代の落語研究会の宴会芸を久しぶりに披露する。いや披露などという上品なものではないだろう、あえて言葉を探すと「ぶっばなす！」だろうか。

クオリティが全く度外視された芸が続く。そしてある女性の芸(?)が凄い。彼女は昔モデルでもやっていたのだろうか、細面で品がありスタイルも良い。ただ私よりだいぶ年上だ。

その芸(?)とは女性の勝負下着の変遷とでもいうか、Tバックなどの際どい勝負下着の実物を20枚くらい持って来て、徐々に下着の布の面積が少なくなり、薄くなっていく様を実物や実演で説明するというもので、もちろん大うけだ。

その下着をかぶって、いや、かぶらずにはいて踊り出す輩もいるから大ハレンチ二次会は大盛り上がりになっていく。

■立ち寄り湯へ

昨夜の宴会も二次会も無事に乗り越え、本日私たちは近くの法師温泉を目指している。宿でマイクロバスを出してくれたので、バスの中は昨夜の宴会の続きのようになっている。

法師温泉はその昔に上原兼と高峰三枝子が国鉄のフルムーンのポスターで混浴していたが、今でも混浴の名湯である。男どもはあわよくば混浴をと思っているのが見え見えで、それに対して女性陣もまんざらでもない様子で「混浴なら受けてたつわよ」という中高年男女の空気感がなかなか面白い。

ところが法師温泉に行く途中で、道路端の看板に本日は休館と書かれている。

今回の幹事役は、一週間前に確認したのにそれはないよと嘆いている。何とかならないかと電話で交渉するも配管の故障で修理のため入浴できないという。

直前に電話確認すれば良かったのかもしれない。そのひと手間こそが重要だと、私にしても良い勉強になる。

そして女性陣からは「せっかくの混浴を楽しみにしていたのに」という本音とも、安堵ともとれる声が聞こえてくる。

その代役で立ち寄った猿ヶ京温泉「まんてん星の湯」も閉館日だ。この施設は大衆演劇もやっているというので期待していたが、これまた残念だ。本日はことごとく嫌われそうだ。

さらに代役の代役で訪れた里山のテーマパーク「たくみの里」は食堂閉鎖中だ。それでもワラ・アート展示という面白いものを見つける。藁（わら）で作った大きなオブジェクトが各所に置かれている。その数は十数体で、直売所の前にあるネズミのワラ・アートは来年の干支にちなんで完成したばかりだと書かれている。



このテーマパークは生活文化体験、養蚕古民家体験、農業体験、里山体験の4つのゾーンから成っており、ゆっくり見ると面白そうな場所である。

そして代役の代役の代役で最後に立ち寄った町営温泉「三峰の湯」でようやく私たちは救われる。山奥の辺りな場所なので入浴客は誰もおらず、私たち男女9人温泉物語の貸切りだが、残念ながら混浴ではない。

豊富な湯量と48°Cの源泉がそのままかけ流しになっている内湯は熱くて入れないが、露天風呂は外気温で冷えてちょうど良い温度になっている。

湯量が豊富ということで100リットルの温泉を100円で売っており、軽トラックに大きなタンクを積んで町民が買いに来ている。

代役に次ぐ代役のドライブにもマイクロバスを運転してくれている天海祐希似の美人従業員は文句ひとつ言わずに笑顔で対応してくれる。むしろ私たちに同情的で代替え案も出してくれるからありがたい。そういう対応がこの宿の魅力なのかもしれない。

宿に戻り、昼食も宿でいただく。その辺の食堂で食べるよりも落ち着いて食べられる。昼食は事前をお願いしていたのではなく入浴直前に決めたのにこの対応には驚きと感謝である。

私以外のメンバーは生ビールを美味しそうに飲んでいる。風呂上がりの一杯は格別だろう。次回は車を置いて来たいと心に留め、帰途に着く。

■温泉評価委員会

私は温泉宿を評価する温泉評価委員会、通称「おひょい」を立ち上げている。それは温泉宿に泊まった時に組織される勝手気ままな委員会で、委員は同行した人になる。何が良かったとか悪かったとか、あれこれ話し合いながらも最終的に温泉や宿を評価して5段階で数値化する。

つきよの館の評価結果は、泉質4、風呂4、料理3、コスパ5、秘湯度3、サービス5、建物・部屋3で総合点は3.86になった。

泉質はPH9.1、湧出温度48℃、低張性アルカリ単純泉である。

■旅の記録

実施は2019年12月2日（月）～3日（火）の一泊旅行の行程を以下に示す。

- ・1日目 10時荻窪駅に集合し関越自動車道月夜野ICで降りる
焼きまんじゅうを食し、後閑駅で電机组メンバーと合流
月夜野びどろパークで昼食、及びガラスアート美術館とガラス工場見学の駅「矢瀬親水公園」で買い物と矢瀬遺跡（縄文時代）見学の駅まで旅館「つきよの館」から迎車、旅館に16時30分着
- ・2日目 旅館の送迎車で法師温泉、猿ヶ京温泉の日帰り温泉施設へ行くも閉館
たくみの里を訪問し、町営温泉「峰の湯」入浴し、旅館で昼食
関越自動車道経由で埼玉県深谷「渋沢栄一記念館」訪問し、17時坂戸駅で解散

総費用は一人分で約1.5万円、詳細は以下に示す。

- ・宿泊費 10600円（月夜野温泉「みねの湯つきよの館」1泊3食、宴会アルコール込）
- ・交通費 約2500円（走行距離約300km ガソリン代約2600円、高速道路料金7400円）
- ・その他 1370円（焼きまんじゅう200円、昼食770円、町営温泉400円）